



担任がつくる本物のコミュニケーションがあふれる授業

三鷹市立第七小学校では、「相手意識をもって主体的にかかわる児童の育成～学ぶ過程を大切にしたい授業づくりを通して～」という研究主題のもと、1～6年生の担任が外国語の授業を行っています。日々の指導で悩みながら指導に当たっていますが、私たちが校内で意識して取り組んでいることを紹介します。



校内研究にあたり本校の教員から出た悩み



- ・教員が英語力に自信がないのに、「聞く」⇒「話す」の授業をどう展開すればいいの？
- ・そもそも児童の聞く姿勢を育てるには？また、児童が自分から話したくなるようにさせるにはどうしたらいいの？
- ・中学校までにアルファベットはどう定着させる？

このような悩みが上がりました。きっと同じように悩んでいる方は多いのではないかと思います。そこで本校の外国語の授業で特に大切にしていることを、以下の4つにまとめご紹介します。

1. まずは指導者が自分のことを話そう！

「聞く」⇒「話す」⇒「読む」⇒「書く」の流れを大切に、繰り返し聞かせることを意識しています。担任はすべてを英語で話そうとするのではなく、**児童の実態に合った言語材料を明確**にし何をインプットさせたいかを意識し、授業を行うようにしています。

6年生 Unit 6 “This is my town.” では、We have～. You can～.の表現を繰り返し使うことを意識しながら、担任が自分の出身地の町を紹介したり、学校がある地域でよく行くお店を紹介したりしました。まずは、**指導者が「自分のことや気持ち」を話す**ことで児童も聞く意欲がぐっと高まり、児童がそれぞれの思いをもってコミュニケーションをすることにつながります。自分のことや本当の気持ちを伝え合うことこそが、「言語活動を通した授業」だと考え、実践しています。

その際「あの言葉は英語で何て言うのかな？」と悩むことがあると思います。しかし、その時間にインプットさせたい言語材料以外は無理して英語で話す必要はありません。英語力に自信がない教員も、自分のことを決められた言語材料で話し、無理なく「聞く」⇒「話す」の授業を展開することを校内で大切にしています。

2. 児童が聞きたくなる・話したくなる発問の工夫

6年生 Unit 6 “This is my town.” では、「三鷹市の良さを伝えよう！」という最終目標を国語科と関連し設定しました。（外国語はA L Tに対して、国語は地域に発信）しかし、毎時間、児童に三鷹市について話させるのは、聞く方も話す方も飽きるので、意欲がどんどん低下していきます。そこで We have～. You can～.などの言語材料を定着させるため、「100年後の三鷹市にあるもの」「夢の教室にある物を紹介しよう」など、様々なバリエーションの発問でやり取りを行いました。**目的・場面・状況を明確にし、子供の自由な発想を大事にする**ことで児童の「聞こう・話そう」とする姿の高まりが見られるようになりました。

また発問を工夫することで、友達の発言を聞く意識がより高まるので、指導者は児童一人一人に答えさせても周りの児童が飽きることなく、言語材料をしっかりと言えているかを確実に見取することもできます。

⇒ 日本語で話しても楽しいことは英語でも楽しい！聞きたくなる、話したくなる！

3. 「台詞の発表会」からの脱却！本物のコミュニケーションへ！



4年生 Let's Try! 2 “What do you want?” の単位では、考えたピザやパフェを紹介するための言語材料を練習するのではなく、児童が「want でいろんなことを伝えられる！」と実感させられるかどうかを意識し、授業を展開していきました。

例「ドラえもんに何をお願いしたい？」「〇〇先生の誕生日プレゼントを買うなら？」

「来月の遠足のお弁当、何入れて欲しい？」「特製野菜ジュースを作るなら？」

ただ覚えたことを「A→B→A→B」と言い合うのはコミュニケーションではないので、活動前に指導者が話し方（話型）を示しすぎないということも重要だと考えます。大切なのは『**児童が思考を働かせ、どのような内容を、どのように話しているか？**』ということです。さらに全学年で、児童が相手意識をもちながら、「相手に伝わるようにどのような工夫をしているか？」あるいは「どのような既習表現を使って伝えているか？」を日々の授業で見取っていくことの大切さを共有しています。

単元を通してつけさせたい力は「オリジナルピザを紹介すること」ではなく、児童が言語材料を使って自分の考えや気持ちを伝え合えるようになることです。学習到達目標を明確にし、何をどのくらい定着させるかを指導者と児童が共通理解するようにしています。それを踏まえて「活用することで定着させる」ことを大切にしています。



4. アルファベットの定着は日々の積み重ね

本校では、3～6年生の授業の始め5分間を使ってアルファベットタイムを設定しています。中学年はアルファベット遊び、5年生は読みとなぞり書き、6年生はアルファベットをランダムに書くことを中心に行っています。日頃からの積み重ねがあるので、6年生の1学期終了時には97%の児童が小文字をすべて書くことができていました。全学年、ワードブックを活用しながら、たくさんの語彙に触れる時間も作っています。指導のポイントとしては、①中学年は、児童が自分からアルファベットの名称を言いたくなるような活動を展開すること、②高学年は、児童の実態に合わせ少しずつアルファベット定着のステップアップを図ること、を校内で意識して取り組んでいます。

3・4年生：アルファベット探し・アルファベット体操・触ると痛そうなアルファベットは？

アルファベットジグザグ歌い・大文字と小文字のマッチングゲーム

5年生：アルファベットの名称と音・四線の指導・なぞり書き

6年生：ランダムで言われたアルファベットに○を付ける→四線上に書く・・・など

外国語の授業で悩んでいる小学校の先生は多くいらっしゃると思いますが、他教科の指導で発揮されているアイディア力が最大の強みです。英語力に自信がない先生でも児童が「聞きたい！」「話したい！」と思う授業はつくれます。本校の教員も先述したような悩みを抱えていましたが、今では外国語の授業について考えることが楽しいと思えるようになりました。そして児童とのやり取りを楽しみながら、日々の授業を行っています。この日頃の積み重ねが、児童と教員の自信につながっています。英語が児童の「心と心をつなぐツール」となるような授業になるよう、日頃の言語活動を通して、子供たちと一緒に、「伝えること・伝え合うこと」を大切にしていきたいです。

(東京都小学校外国語教育研究会 TEFLEA 役員・

第17回全国小学校英語教育実践研究会東京大会実行委員)

